

房総の文化財

VOL.60



- 【遺跡紹介】 流山市下花輪荒井前遺跡
- 【コラム】 令和2年度出土遺物公開事業から
 - ◆ 銚頭にみる交流のしるし
 - ◆ 遺跡にみるエミシ(俘囚)の移配
- 【出土遺物公開事業】
 - ◆ 令和2年度の報告「北方交流録ー北とつながる五つの物語ー」
 - ◆ 令和3年度の予告「らくがく縄文館ー縄文土器のマナビを楽しむー」

下花輪荒井前遺跡調査風景

発行 | 公益財団法人 千葉県教育振興財団

発行日 | 令和3年3月30日

編集 | 〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL. 043-422-8811(代) FAX. 043-424-8850
URL http://www.echiba.org/bunkazai_top.html



ISSN 0919-0848
B666 no bunkazai

遺跡紹介

下花輪荒井前遺跡 (流山市)

流山市初の方形周溝墓

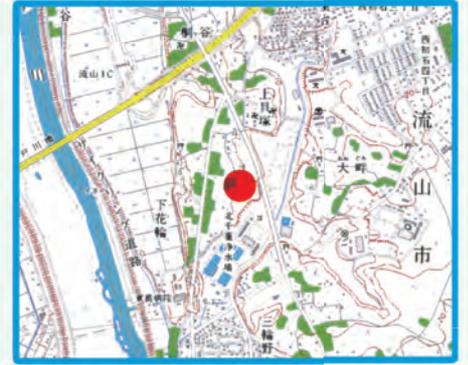
(流山市下花輪荒井前遺跡)

しもはなわ あらいまえ

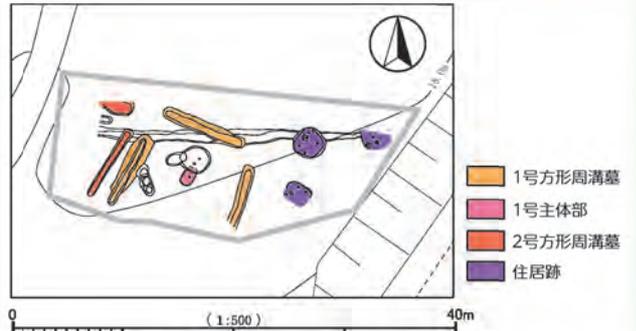
下花輪荒井前遺跡は、流山市の中央部西側、江戸川の東700mの台地上に所在しています。発掘調査は、北千葉広域水道企業団の水質試験棟建設に先だって、令和2年8月～9月に実施しました。

調査の結果、縄文時代早期の炉穴2基と竪穴建物跡1軒、弥生時代中期の竪穴建物跡3軒、方形周溝墓2基などが見つかっています。

この調査で注目されるのは、流山市を含む東葛地域北部で初めて見つかった方形周溝墓です。方形周溝墓は弥生時代から古墳時代前期にかけて見られますが、この遺跡の方形周溝墓は四隅の周溝が途切れるタイプで、弥生時代中期の特徴を持っています。2基の方形周溝墓は、ほぼ同じ向きできわめて近接して築造されており、意図的な配置が想定されます。



遺跡の位置



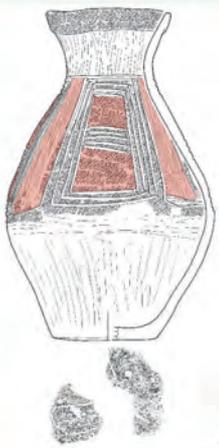
弥生時代遺構全体図



西側周溝の弥生土器出土状況



方形周溝墓全景(東から)



北島式系統の弥生土器



上段の土器は、西側の周溝から見つかっています。折り返し状の複合口縁をもち、口縁部に縄文を施文しています。胴部上半には、縄文を地文とした3～4条の沈線による重四角文が4単位描かれています。底部には木葉痕が残り、意図的に穿孔された痕跡が見られます。

この土器は、弥生時代中期後半の宮ノ台式土器とは異なり、利根川中流域の埼玉県熊谷市北島遺跡を標識遺跡とする「北島式土器」の系統を汲む土器と考えられます。

一方、方形周溝墓中央の主体部と思われる長方形の土坑からは、全面に赤彩が加えられた宮ノ台式土器の特徴をもつ土器(下段左)が、周溝内からは磨消縄文の土器(下段右)が伴っており、バラエティーに富む土器が一つの方形周溝墓に納められていることとなります。



宮ノ台式の弥生土器



磨消縄文の弥生土器

縄文時代の展示コーナーでは、骨角器の1つである「銚頭」をとりあげ、関東地方と東北地方の出土品をもとに、縄文時代の文化的交流についてアプローチしました。

東北地方の銚頭

(宮城県石巻市南境貝塚)

東北地方の展示コーナーでは、宮城県石巻市南境貝塚から出土した銚頭をメインにとりあげました。南境貝塚が位置する仙台湾周辺(宮城県)は全国第3位の貝塚密集地帯(貝塚数200か所以上)です。このうち縄文時代中期後半から後期の貝塚では、主に「南境型」・「沼津型」と呼ばれる銚頭が発達します(写真)。この地域の銚頭は、銚縄の装着部に「孔(索孔)」を設けることに最大の特徴があります。中期の南境型銚頭から後期の沼津型銚頭、晩期の燕形銚頭に至るまで、その伝統が連綿と受け継がれていく様子がよくわかります。



石巻市南境貝塚出土の銚頭

関東地方の銚頭

(袖ヶ浦市山野貝塚)

東北地方の銚頭と異なり、関東地方の銚頭では、銚縄の装着部に「溝(索溝)」や「肩(索肩)」を設けることに特徴があります。写真の3は国史跡袖ヶ浦市山野貝塚から出土した縄文時代後期の銚頭です。柄に装着する基部が、逆台形状に加工されていることがわかります。出っ張り(索肩)に銚縄を括り付けて使用したと考えられています。

銚頭にみる交流のしるし

(館山市大寺山洞穴)

後期中頃になると、関東地方でも、銚縄の装着部に「孔(索孔)」をもつ銚頭が現れるようになります。写真の2の館山市大寺山洞穴例もその1つです。一見すると、東北地方の銚頭と見誤ってしまいそうですが、よく見ると関東地方の特徴である「索肩」と思われる出っ張りが残っています。おそらくは、東北地方の銚頭を参考にして、関東地方の縄文人の手によって作られたのでしょう。



1. 南境貝塚(宮城県石巻市)
2. 大寺山洞穴(千葉県館山市)
3. 山野貝塚(千葉県袖ヶ浦市)

律令国家による「征夷」によって多くのエミシが捕虜や投降者となり、彼らを「倭囚」として関東以西の地に強制的に移住させる「移配」が行われたことが史料から確認できますが、エミシの地の住居に一般的な長い煙道部のカマドをもつ竪穴式住居が上総北西部の東京湾岸に集中することや、「蝦夷の刀」と呼ばれる蕨手刀が発見されたことにその一端を垣間見ることができます。

長煙道カマド

カマドが採用された古墳時代以降、短い煙道部が一般的ですが、東北地方で普遍的な長煙道カマドをもつ竪穴住居跡が市原市・袖ヶ浦市・木更津市の遺跡から数多く確認されています。古代の郡としては、市原郡・海上郡・望陀郡の範囲となります。

史料によって、倭囚は関東以西の多くの国に移配されていることが確認されますが、長煙道カマドというエミシの住居形態に固執した地域は他になく、上総北西部の地に移配された集団の特性が伺われます。



短煙道のカマド (印西市西根遺跡)



長煙道のカマド (袖ヶ浦市永吉台遺跡群)



長煙道のカマド (仙台市長町駅東遺跡)

蕨手刀

蕨手刀は、古墳時代の終わり頃から平安時代にかけて全国で320点ほど確認されていますが、その大部分は宮城県・岩手県・北海道に集中しています。その中の柄に透かしが入る「毛抜透型蕨手刀」は全国で9点しかなく、岩手県4点に続き千葉県で2点見つっています。県内での出土例は、市原市南大広遺跡と袖ヶ浦市根形台遺跡群です。

蕨手刀は、東北北部や北海道に特有の「末期古墳」からの出土が多く、被葬者の性格を伺わせるとともに、長煙道カマドが集中する市原市と袖ヶ浦市で発見されたことに注目されます。



毛抜透型蕨手刀 (袖ヶ浦市根形台遺跡群)

令和2年度の報告

【北方交流録ー北とつながる五つの物語ー】

今回の展示では、千葉県を中心に、宮城県・福島県を主とした南東北地方及び北関東地方の出土品などから、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の五つの時代を通じた文化的・社会的交流の様子を紹介しました。旧石器時代は、「日本列島、北から南からー技術と使用石材の変化からみた集団の土着化ー」と題して北方系細石刃石器群と国府石器群を、縄文時代は、「漁撈活動にみる地域間交流と地域性」と題して、主に漁撈具の一つである銚頭を取り上げて紹介しました。弥生時代は、「弥生再葬墓と地域間交流」をテーマとして、再葬墓に使われた土器の地域性を通して、房総と各地域との活発な交流にスポットを当てた展示を行いました。古墳時代は、「房総から南東北へー人とモノの移動ー」として、古墳時代後期の土器や直刀などを通して房総から宮城県・福島県への移動について紹介しました。最後の奈良・平安時代では、竪穴住居の長煙道カマドや蕨手刀・墨書土器を通して、「俘囚の移配と集落ー東北から房総へー」と題した展示を行いました。



展示風景(流山市立博物館)

【展示開催館と期間】解説会各館3回実施

- 流山市立博物館
令和2年7月18日(土)～8月30日(日)
- 芝山町立芝山古墳・はにわ博物館
令和2年10月3日(土)～11月29日(日)
- 千葉県立中央博物館
令和3年1月9日(土)～2月14日(日)
※新型コロナウイルス感染防止のため中止

< 関連行事 >

- ワークショップ 土器洗い
流山市立博物館 8月5日・8月21日
- ミニチュアはにわづくり
芝山町立芝山古墳・はにわ博物館 11月8日

令和3年1月31日(日)開催の講演会は中止となりました。
なお、当日の発表要旨については、展示図録とともに
当財団ホームページに掲載しています。



令和3年度の予告

テーマ 「らくがく縄文館ー縄文土器のマナビを楽しむー」

研究者や芸術家をはじめ、多くの人々を魅了し続ける「縄文土器」。その研究テーマは、土器型式や地域性、文化、製作技法などの考古学に関わるものから、芸術的観点からみた造形美など、きわめて多岐にわたり、数多の「マナビ」を秘めています。

令和3年度の出土遺物公開事業では、「えりすぐり」の縄文土器を県内外から集結し、一挙大公開します。「らくがく縄文館」で縄文土器が秘めた「マナビ」に楽しみながら触れてみてください。



加曾利E式土器(千葉市加曾利貝塚)
※「かそりーぬ」が被る帽子のモデルです。



加曾利B式土器(同左)

【展示の構成】(予定)

- 第1章 縄文土器の造形美
- 第2章 縄文土器のライフサイクル
- 第3章 土器型式と標式遺跡
- 第4章 土器型式の移り変わり
- 第5章 土器型式に見る地域性と文化の広がり

【展示開催館と期間】

- 市立市川歴史博物館
令和3年7月24日(土)～9月12日(日)
- 八千代市郷土博物館
令和3年10月16日(土)～12月5日(日)
- 袖ヶ浦市郷土博物館
令和4年1月15日(土)～2月27日(日)

【講演会】

- 千葉県立中央博物館講堂
令和4年1月22日(土)

